
誰にも優しい佐藤さん

花弁当

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰にも優しい佐藤さん

【Nコード】

N8845X

【作者名】

花弁当

【あらすじ】

佐藤さんは誰にも優しい。

正直タイトルを”誰にも”にするか”誰にでも”にするか迷った。そんなどうでもいいことを優しく微笑みながら聞いてくれる佐藤さんは優しい。

あらずじとか特に思いつかない、そう言う僕を笑いながら怒ってくれる佐藤さんはかわい——優しい。

こんな小説読んでくれる人いるのかな、って思っている僕に、ほらこのくだらないあらずじを読んでいる人がいるよ、ってささやいて

くれる佐藤さんは優しい。
できるならその優しさを、僕だけのものにしたい。

佐藤さん。

『あ、松上くんおはよう』

僕にとって彼女は”特別”だった。

『松上くんって、普段何してるの?』

しかし彼女にとって僕は”特別”なんかじゃなく、

『……うん、分かった今行くっ! それじゃ、またね松上くん』

単なるクラスメイト、知り合い、普通。

『よし今日は松上ちゃんと組もうかなっ』

けれど彼女は優しい。

『あははっ! 松上くんておもしろいねっ!』

誰にでも優しい。

『またね、松上くん!』

佐藤さん。

「……………決めた」

眩いて、僕は目を開く。

カーテンの隙間から眩しい日の光が漏れてきて、思わずまた目をつぶりそうになったけれど、それを我慢して起き上がった。

そして、深く深呼吸。

……セーの。

「佐藤さんに、告白しよう!」

ベッドの下には、強く叩きすぎて壊れてしまった目覚まし時計が転がっていた。

「よう、松上」

「おはよう、緑川」

AM 8:50。

クラスに入ると、友人がいつものように僕へ近づいてきた。どうでもいい会話を適当に受け流しながら、僕は自分の席へと向かい、着席する。一番後ろの窓側の席。分かりやすく言うならば、

”主人公”の席だ。

「おいどうした松上。なんか顔が怖いけど……」

怖い、という表現にはいささか語弊があるな。それでは僕が不機嫌だというふうに捉えられてしまうかもしれないが、それは間違いだ。僕は今、とてつもなく……とてつもなく、緊張しているんだ。

「緑川、聞いてくれるか」

何と言つても、今日は。

「僕……佐藤さんに告白しようと思うんだ」

そう、決めた日だから——ん？

「おい緑川、何故考える人のポーズで笑いをこらえている」

僕の発言を聞いた彼は、隣の席の机に座り、先ほど述べたポーズで肩を揺らしていた。時折笑い声を漏らしながら。

「ぶつあはははあつ！ やっぱり耐えらんねえー！！」

「な、何がおかしいんだよ」

「全部だよ全部っ！」

一発殴ろうかと思ったが、緑川はラグビー部でがたいも僕より格段に良いため止めておいた。いや違う、ビビったわけじゃない。ほら、部活やってんのに僕の最強パンチで肩とか壊しちゃったらかわいそうじゃん？ な？

というわけで、不服ながらも彼がひとしきり笑いきるのを待ち、収まってから再度問いをぶつける。

「答える緑川。僕の発言の何がおかしい」

「くふふ……いや、だからさあ、逆にこっちから聞かせてもらっけ

ど、何で告白しようと思ったわけ？」

「はあ？ …… そりゃ好きだからに決まっているだろ」

「違う違う、そういう意味じゃなくて……告白して、どうすんの？」

僕がイスに座り、緑川が机に座っているため、自然と視線は上になる。何故か見下されているような感じがして、嫌な気分だった。

「佐藤に告白して、フラれて、落ち込んで、終わりだろ？」

「なっ……！」

「そう怒るなよ松上。別に俺はお前に魅力がないからこう言っているわけじゃない」

立ち上がりそうになった僕の肩にポンと手を置き、緑川は続ける。

「佐藤と釣り合うやつなんて、この世にはいないんだ」

そう言った瞬間、教室の後ろの扉が開き、彼女が姿を現す。

「うわ〜！ 危ないっ、ギリギリセーフだねっ？」

容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ拔群。

佐藤こよみ、十七歳。

「もー、こよみはいつも遅刻ギリギリなんだから〜！」

「おっ、佐藤髪型変えた？」

「こよみおはよう〜！」

「おはよ、佐藤！」

彼女の元には、自然と人が集まる。男も女も、みんな、みんな集まる。

「僕の時には緑川しか集まらなかったぞ……」

「うるせ。来る友達がいるだけありがたいと思え」

佐藤さんは人気者だ。その最たる理由は、

「松上くん、緑川くん、おはよっ！」

誰にでも分け隔てなく接するところ。

「おはよ、佐藤」

「お、おはよう」

ニコツと笑みを見せて、彼女は自分の席に赴いていく。

着席し、佐藤さんの席に人が集まるのを見届けてから、僕は再度緑川の方を向いた。

「緑川、僕だつて分かっているよ」

「あん？」

「佐藤さんのイメージカラーが白だとすれば、僕は黒……」

「いやそんな格好良い色じゃないだろ。グレー……いや、ねずみ色か？」

「どつちも変わらんわ！」

とにかく、と仕切り直し、そろそろ担任が来ることだと頭の隅で考えつつ、僕は言葉を放った。

「僕には、絶大な自信がある」

おい、緑川。そのゴミを見るような目は止める。

「その自信の根拠……理由となる部分を言つとすれば……！」

チャームが鳴り、担任教師が教室に入ってくるのを目の端で捉えながら。

僕は言った。

「僕が、”主人公”だからだっ！！」

友人、緑川は。

何も言わずに去っていった。

一時間目は数学だった。

頭が冴えている時はなんてことないが、何か考え事があつたりすると、この教科は一気に面倒くささが増す。計算式なんてやってられるか。

僕はノートから視線をはずし、一番前の廊下側、佐藤さんの方へと目を向ける。

しばらく眺めていると、その視線の到着地点の中間にいる一人の男、緑川がこちらを振り向いてきた。

そして、汚物を見るかのような表情を僕に見せる。

「あの野郎……」

もし彼がラグビー部でなかったら、僕はこの場で殴りかかっていたことだろう。

……確かに。

確かに緑川の言いたいことも分かる。どう考えても僕と佐藤さんでは天と地の差。アイドルとファンのような距離がある。

当然のように佐藤さんは男子からモテるので、僕みたいな想いを抱えた奴らが何人も挑戦しては、散っていった。こいつならイケんじやね？ と周りからはやし立てられていたイケメンも、タイタニックのように沈んでいった（？）

なのにお前みたいな冴えない一般生徒が学校のアイドルみたいな人と付き合えるか、とまあ緑川はこんな感じに言いたいんだろう。

分かるさ、僕だってそう思う。

佐藤さんにとって僕はただのクラスメイトでしかないし、話しかけられるからといって、それは他の人間にも行っている所業だ。僕以上に縁のなさそうなやつにも同じように話しかけている。

そういうやつはすぐ彼女に惚れてしまい、告って散るといのは、非常によくあるケースだ。もしかしたら僕もその一例なのかもしれない――が。

「……でも」

でも俺……！

「では次の問題を……松上、やってくれるか」

でも俺は……っ！

「松上？」

”主人公”だから……ッ！！

「おい、松上」

”主人公”だからああああ！！！！

「松上いいッ！！」

「はい！ ごめんなさい！！」

結局いつの間にか指されていた問題は分からずじまいでした。

「はあ、一時間目は災難だったよ」

「授業を聞かずに誰かさんを眺めていたお前が悪い」

現在は昼休み。僕は作ってもらった弁当を広げ……え？ いや違う、違う、彼女に作ってもらったわけじゃなくて、普通に母親からだよねに、勘違いしちゃった感じ？ 困るなあ。

……とまあ冗談はさておき、僕は自分の席で弁当を食べ、その前の席に緑川が座り、彼は購買から買ってきたパンを食べているという構図だ。

「さて緑川、相談があるんだが」

「なんだよ？」

「佐藤さんにいつ告白すればいいと思う？」

僕がそう言ったとたん、ぶふおつと飲んでいたお茶をこぼしそうになる緑川。冗談を言った覚えはないけどな、と思いつつ弁当の卵焼きを口に入れる。

「お前まだ諦めてなかったのかよ！」

「ふあんでふあきらめふんだふお！」

「食ってから話せ！」

「……………ん、なんで諦める必要があるんだよ？」

「はあ。だからさ、お前じゃどう考えても無理だって。確立としちゃ俺とお前が喧嘩してお前が勝つようなもんだ」

「ゼロパーセントじゃないか！」

いやでも、もし緑川が風邪をひいていれば、なんとかなるか……？ さすがに三十八度くらいあればへ口へ口だろうし……。

「よし緑川、寒中水泳してこい」

「意味分かんねえっつの！ とにかく、お前じゃ嫌な思いするだけで終わるぞ。これから佐藤とともに口きけなくなってもいいのか

よ」

僕は佐藤さんのところに視線を移す。彼女はいつものようにたくさん生徒に囲まれ、おいしそうにお弁当を食べていた。

確かに、もしも告白してフラれた後じゃ、会話しづらいだろうなあ……。いや、佐藤さんは相変わらず話しかけてくるかもしれないけど、僕が気まずいな。

「でもさ、緑川」

「あん？」

「ほら、僕主人公だし」

「……………はあ」

思いつきりため息をつかれる。何が彼にとって不服なのだろうか。

「お前のその……主人公だからっていう理由は、なんなんだ？」

「なについて言われても……。例えば緑川は、恋愛小説で主人公とヒロインが結びつかなかったのを見たことがある？」

「いや……あんなないけど」

「だろ？ そういうことだ」

「どういうことだよ……」

緑川は呆れたように再度ため息をつき、残っていたパンを口に放り込んでから、お茶をがぶ飲みする。手に持ったペットボトルをガタンと机の上に戻して、彼は言った。

「分かった、分かったよ松上。そこまで言っんなら俺も協力してやる」

「ほんと！？」

「ああ、お前がフラれてまで自分の中の整理をつけたいなら、俺も

止める理由はない」

「フラれるって……」

なんか納得しない言い方だけど、ここで言ってもまた口論になるだけだから止めておこう。

「で、具体的な告白の仕方だが……時間としてはやはり放課後だな」

それには僕も賛成だ。やっぱり告白としてはその時間が定番だろう。

「そして方法。これもベタな案になるが、下駄箱に放課後屋上まで来てください、という内容の手紙を入れ、相手が来るのを待つ」

「ほんとにベッタベタだね」

「しかし！ この作戦には一つ重大な問題がある！」

「な、なに！？」

「屋上は普段鍵がかかっているからどうしようか、ってこと！」

「まじかよ！ 普通こういう展開のある学校はいつでも屋上が使えるとかそういう風になっているはずなのに！」

「そしてもう一つ！」

「一つだけじゃなかったのかよ！」

緑川は人差し指を立て、僕の顔の前へと突き出す。僕はこのまま話していると弁当食べ切れそうにないなあ、と考えながら彼の話聞いた。

「……これでは、お前の恋が成就する確立がパーセントにも満たない」

「ひどい言われようだ！」

「まあつまりは、ただでさえ好感度の低いお前が普通に告白しても、何の可能性も感じられないってことだ」

「じゃ、じゃあどうすればいいんだよ？」

「決まっている。お前が普通ではない告白をして、彼女から『あつ、この人面白い。この人となら付き合ってもいいかも』と思わせるしかない！」

そんな理由で付き合う人がいるのか……？ まあ僕も付き合ったことないから分かんないけど……。

「具体的には、どうすればいいわけ？」

「そうだな…… トイレットペーパーを顔中に巻いて告白するとか」「逃げられるわ」

「または、トイレットペーパーを体中に巻いて告白」「変わんねえよ！」

どっちもただの変人だ！ 間違いなくフラれる！

「ま、あと二時間もあるんだ。気長に考えろよ」

そう言つて緑川は席を立つ。時計を見ると、昼休みはもう終わりにかけていた。

「おい緑川！」

「やり方くらいは自分で考えろつつの」

「お前と話しているせいで弁当食べ切れなかったじゃないか！」

「そっちなよ！」

まったく、お母様特製の弁当だぞ……。

にしても告白の仕方か。ちゃんと考えとかないとなあ……。

「便座力バーを首にかけながら告白とか……どうだろう」

考えている途中、緑川が「ま、今まで佐藤に浮いた話がないってことは、他に好きな人がいるのかもしれないけどな……」と明らか僕に対して放ったであろう発言は、聞こえないふりをした。

五、六時間目は僕の思考タイムと化した。

どのようにすれば佐藤さんに好印象なのか、どのようにすれば佐藤さんの好感度が上がるのか、どのようにすれば……この恋が実るのか。

そして忘れてはいけないのは下駄箱に入れる手紙だ。これはシンプル且つ相手の気を引くような文面にしなければならない。なので、

『佐藤さんへ

えっと、その何というか……放課後？ いや、放課後ってなんで放課後っていうんすかね。だって聞いただけじゃ放火後とも読み取れるじゃないですか。あっちうち！ ↑火

ってやべ、僕何言ってるんだろ。まじ痛えわー（↑言つてと痛えをかけた）。こうやって話し逸れるの悪いクセなんすよね（笑）

そう、それで何で佐藤さんに手紙書いたかという放課後、屋上に来て欲しいからなんです！ やつべ、恥ずかしい（微笑）

伝えたいことがあって、このレター（↑何故英語 笑）をあなたに届けました。

どうか、僕の願いをきいてくれることを、祈っております。神の名の下に。

松上より』

「完璧だな……」

堅苦しい文面にせず、今まで貰ってきたであろう手紙と一味違った感じにして、思わず微笑んでしまうかのような文章。

国語の評定が二だった俺にしては、なかなか良い仕上がりになっている。ちゃんと笑いどころが分かるようにチェックもつけたし……。まさに完璧、だ。

後で緑川にも見せようかと思ったけど、面倒だからいいか。あいつのことだからこの完璧な文章でもケチをつけかねないからな。

なんてことを考えていると、授業終了を告げるチャイムが鳴った。その後の帰りのホームルームを終えるまでには、どのようにして佐藤さんに告白するかも見事にイメージが出来上がっていた。

「いけるぜ……！」

期待を胸に、僕は下駄箱へ急ぐ。佐藤さんは今日掃除当番のはずだから本人に見られる心配はないけれど、手紙を入れるところを周りのやつらに見られたら少しやっかいだ。

「佐藤佐藤……あつた！」

下駄箱の前で左右を見直し、誰もいないことを確認してから僕は手紙を入れた。これでまずは、一つ目の課題終了と言ったところか。今気づいたが、朝と違って今の外は薄暗い。眩しいくらいに輝いていた太陽が、雲に隠れてしまっているようだ。ただでさえ日の当たりづらい昇降口が、さらに薄暗くなっていて、少々気味が悪い。

「雨が降らなきやいいけど……」

その言葉を残し、僕は廊下に戻った。一番端の階段近くまで足を進めると、見慣れた姿が僕の前に現れる。

「手紙はちゃんとできたか、松上」

「ああ、大丈夫だよ緑川。バッチリだ」

「そつか。んじゃこれ」

シュツと投げられたのは、屋上を開けるための鍵だ。僕はそれを片手で格好良くキャッチしようとして失敗し、床に落ちてしまったそれを腰を屈めて拾い上げる。

「……サンキユな、緑川」

「めっちゃかつこ悪いぞ、お前」

ふっ、ほっとけ。

「にしても、よく借りられたな」

「ああいや、用もなく借りるのは難しかったから、人のいない時を見計らって盗んできただけだ」

お前ってやつは……。

「……それじゃ、僕は佐藤さん告白用の装備を身に着けることにするよ」

「お、考えがまとまったのか。俺にも見してくれよ」

「ん、じゃあちよっと待ってて」

僕は近場の男子トイレへと移動していく。

「トイレにあるのか……？」

緑川の声を見殺し、僕はトイレにある掃除用具入れの扉を開けた。

「うん、全部あるな……」

ホース！

バケツ！

便所ブラシ！

便座カバー！

トイレットペーパー！

「見る！ 緑川！！」

僕は二時間費やして考えた結果を、友人に披露する。

「体にホースを巻きつけ！ バケツを頭にかぶり！ 便座カバーを首に巻いて！ 両手に便所ブラシを持ち！ トイレットペーパーを全身に降り注ぐ！！」

見るよ、緑川……これが、これが俺の考えた……！

「佐藤さんに告白するための格好だああ」「バカかテメーはああああ！！！！」

僕は人生で初めて、容赦のない飛び蹴りを体にくらう。

「ぐふおおおっ！」

「コラ！ 松上コラア！」

そのままマウントポジションをとられ、首を上下に揺さぶられる僕。

「ちょ、ちょ緑川やめ、スト、ストップ」

「てめえナメてんだろ絶対いい」

約一分間そうされた後、ようやく僕は解放された。苦勞して考えた装備は、緑川との死闘により綺麗さっぱり僕の体から取り除かれている。

「はあ、はあ……一体どうしたって言うんだ、緑川……」

「くそ、説教をするのも面倒だ……もういい、とりあえずそれ片付けて来い」

指で床に散らばった掃除用具を指され、僕は渋々それらを元にあった場所へ片付けていく。……よし、こんなもんか。

「おい松上。もういいや、昼休みの俺の発言は忘れる」

「え、寒中水泳の話？」

「俺がいつそんな話をしたよ！ 普通じゃないやり方で佐藤にアピールしろと言った話だ！」

「ああ、それね」

忘れるってことは……なしにしろってことか？

「じゃあ普通に告白すればいいの？」

「ああ、そうだ。その方がまだ可能性があるだろ……」

ふうん、まあいいけど。僕は手に持った鍵を改めて握り直し、緑川の方を向く。

「それじゃ、待たせちゃ悪いし……行ってくるよ」

「ああ、頑張つてな」

緑川に背を向け、僕は階段を上る。彼の姿が完全に見えなくなりそ

うなところで、再度声をかけられた。

「松上！」

「なに？」

「俺も散々無理だとか何だと言ったけど、正直今もその気持ちは変わらないけど！」

「……うん」

「でも……悔いのないようにな！」

何だかんだ言って僕を応援してくれる親友の方を振り返り、僕は親指を立て、言う。

「ああ、任せろー！」

緑川はニツと笑って、僕を送り出してくれた。

そして今度こそ、屋上へと続く階段を駆け上がる。

……なんかこれ、すげえ最終回っぽいぞ……！！

と、そんなことを考えながら。

「あの、松上くん！」

すると、ふと声をかけられた。

一体誰だ？ 僕は最終回の主人公気分を存分に味わっていたというのに……。

つて、待てよ？ 今の声……。

「松上くん！」

「さ、佐藤さん！？」

光の速さで振り返った先にいたのは、我らがマドンナ、佐藤さんであつた。僕は階段を上ろうとする足を止め、テンションが上がつたばかりに沸き出てきた額の汗を拭う。

でも何故？ 待ち合わせは屋上つて書いたはずだし、もしここで偶然見かけたとしても空気くらい読んでくれていいんじゃないのか？ い、いやもしかしたらあの手紙を貰つて浮かれてしまい、待ちきれず僕に声をかけた……？

「私、図書委員なのっ！」

ああ、違つた。

「と、図書委員……？」

「うん！ 放課後に図書室で仕事があつて……だから松上くんとの約束が……」

こちらが一方的に押し付けた約束なのに、申し訳なさそうに話す佐藤さん。ただの天使だつた。

しかしどうする？ 彼女の言っていることは嘘ではないだろうし、そうすると告白はできない。待つてたら佐藤さんは気を使うだろう

し、かと言って明日に延期するのみなあ……。
あ、そうだ！

「じゃあ佐藤さん！ 僕もその仕事手伝うよ！」

精一杯の笑顔で伝える僕——って待て待て！ 何を口走っているんだ僕は！ これじゃあただのストーカーじゃないか？ 無理やり仕事を手伝って近づこうとする……。普通の女子なら、

『はあ？ 何ソレ、きも！』

『え、まじで？ じゃあアタシの分もよろしくっ！』

って展開になるのは間違いないぞ！ うおお、何という失態……！

「本当に！？ 松上くん！」

「え？」

階段の下にいる佐藤さんは、瞳を輝かせながら僕に確認を取っている。

そうだ……。何を勘違いしているんだ、僕は。相手は普通の女子なんかじゃない、佐藤さんだぞ？ みんなのアイドル、佐藤さんじゃないか！

「あ、でもそれはやっぱり松上くんに悪いような……」

「いやいやいや！ 全然！ 僕本とか好きだし！ 苗字を松本にしてもいいくらい本好きだし！ ぜひ手伝わせてください！」

我ながら意味の分からないアピールだ。

「じ、じゃあ……。お願いしてもいいのかな？」

「任せて！」

ありがとう松上くん、と極上のスマイルで続ける佐藤さん。僕はもうここで死んでも悔いはなかった。

階段を素早く下り、佐藤さんと一緒に図書室へと向かう。

「ど、どんな仕事をするの？」

「えーっと、本の整理とか、貸し出しカードの確認とか」

本の生理……？ 本って女の子だったっけ……？

「それ一人でやるつもりだったの？」

「まあ、こう見えても副委員長ですからっ」

そう言って胸を張る佐藤さん。可愛い以外に言葉がなかった。数分すると目的地に着き、ガララ、と音を立てて僕らは中に入る。

「図書室なんて久しぶりに来たよ……」

「え？ 本好きなんじゃ」

「い、いや！ 行くのはいつも地元の図書館でさ。週八で通ってるんだ！」

「それは多すぎるような……」

図書室の中に人はおらず、窓からは僅かに赤みがあった日の光が差し込めていて、いかにも放課後の図書室といった雰囲気だった。たくさんの書物に囲まれたテーブルのイスに、僕は腰を下ろす。

「それじゃ、仕分けする本を持ってくるから、ちょっと待っててね」

奥の教室に消えていく佐藤さんを見て、僕はやっと緊張の糸を解く

ことが出来た。

「ふう」

予定とは少し違っけれど、これはこれで悪くない展開だよな。さすがに今告白するとその後が怖いから、別れ際にするとして……。

少しするとたくさんの本が入ったダンボールを佐藤さんが抱えてきて、ガタンと音を立てながらテーブルの上に置いた。

「すごい量だね……」

「これがあと二、三箱分かな」

「まじっすか……」

「あ、最後まで付き合う必要なんてないからね！　きりの良いところまでやってもらえたら、後は私がやるし」

「ああいや、そういうわけにはいかないよ。僕も最後まで付き合う」

そうしないと告白のタイミングが掴めないし……。

「そう？　それじゃお言葉に甘えさせてもらおうかな。ありがとねっ」

ダンボールから本を取り出し、渡されたカードに記入してから、種類ごとに分けて重ねる。

単純といえば単純な作業だが、量が量だけに疲労も半端じゃなさそうだ。

「これいつも一人でやっているの？」

「んーまあね。と言っても二週間に一回の割合だから、すごく多いわけでもないよ」

「誰か同じ委員の人に手伝ってもらえばいいのに……」

「それも出来はないんだけど、私、三年生になったら委員長をやるつもりだからさ。今の内にいろいろな経験を積んでおきたくて」

委員長か……佐藤さんなら何でも出来る気がするけどなあ。
どこかで見たことのあるような本を手に取りながら、僕は会話を続ける。

「すごいね、佐藤さんは。僕なんてそんなの一度もやろうと思ったことないよ」

「そう？ 松上くんもできそうだけどな」

「例えば何委員？」

「えっ、うーん。そうねえ……」

「あ、思いつかないんだー」

「ち、違っ違っ！ どんな委員会があつたか思い出せないだけっ！」

あはは、と笑う僕につられて、クス、と笑みをこぼす佐藤さん。

ひとしきり笑った後、佐藤さんは作業をしていた手を止めて、窓の方に顔を向ける。

「憧れてるんだ。委員長のこと」

「へえ、憧れ……憧れ？」

憧れる＝尊敬する＝気になる＝好き

え？ え？ え？

「ち、ちちちちなみにその委員長さんはどんな方でいらっしやるのですか……？」

「格好良くて、頼りになって、背も高くて……」

うわああああああ、やめてくれ。多分すべてにおいて僕が負けて

いる。

「へ、へえ。すごいんだね、委員長さんて……」

「うん、私あの人のこと大好きだもん……」

「へ、へえええええ」

死のう。本の角に頭を打って死のう。

「じ、じゃあ付き合っちゃえばいいじゃん。佐藤さんならきつと上手くいくよ……」

僕の発言を聞いた後、佐藤さんは不思議そうな顔をしてから、小さく笑った。そして顔の前で手を横に振り、否定の仕草をする。

「アハハ、違う違う。そういう好きじゃないって。第一委員長は女だし」

お、女……！？

「さ、佐藤さんはそういう趣味だったの！？」

「だーから違うって！ 尊敬しているっていう意味で好きなの！ 恋愛感情なんかじゃないよ」

「あ、そういうことが……」

良かった。本の角で頭をぶつけた後、ページを口に含みながら窒息死する必要はなくなったみたいだ……。

「なに？ ひょっとして焼きもちやいてくれた？」

「あ、いや、ええと……！」

否定も肯定も出来ずに、ただただ慌てる僕。

「あははっ、ごめんごめん！ 冗談だよ」

「じよ、冗談……」

ふう、と一息ついて、再度仕事に取り掛かろうとした時、佐藤さんが「あ！」と声を上げた。

「外……雨降ってる」

「え？ ……あ、ほんとだ」

さっきまで日の入っていた図書室もいつのまにか暗くなっていた。風も強いのか、雨は音を立てて窓にぶつかっている。

まずいな、傘持っていないや……。濡れて帰るしかあるまい。

「これからもっと強くなりそうだし、早めに終わらせよう！」

「うん、そうだね」

止めていた手を動かし、本やペンを掴み取る僕。精一杯急いでいるつもりだが、それでもやっぱり手馴れているのか、佐藤さんの方が何倍も早く感じられた。

「よし！ こんなもんかなっ」

「ふうー。僕の方もなんとか終わったよ」

本が山積みになされたダンボールを数箱片付け、僕は腕を伸ばす。結局半分半分に分けられた仕事は、僕が遅いこともあり、三分の二以上を佐藤さんにやらせてしまった。まったく情けないものである。

「それじゃ、分けた本をまた戻さなきゃね……松上くん、手伝ってくれる？」

「ああ、もちろん」

ダンボール箱を両手で抱え、僕たちは奥の教室に向かう。

「この辺に置けばいいのかな？」

「うん、ありがとっ」

荷物が重なっているところに物を乗せ、佐藤さんの方を振り向く。彼女は高いところに物を乗せるため、苦戦しているようだ。

「ぐぬぬ……」

「無理しないでいいよ佐藤さん。そこは僕がやるから」

「で、でももうちょっとなの……！」

プルプル震える腕でダンボールを上へ上げ、棚の上に置くようにしている。危なっかしいことこの上なかった。

「ほ、ほら！ できた！」

結果、僅かに乗った部分を押し込めることで成功したようだ。

「はは、随分無理やりだね。奥に何か物でもあったんじゃないの？」

「いーの、いーのっ。今日の仕事はこれで終わりっ！」

「そうっすか」

それじゃあ、と扉の方に向かおうとした瞬間、僕は目の端に何かを捉えた。それが何かと判断するよりも先に、体をそちらの方に動かす。

——無理に入れたことで、棚の上の物が落ちそうになってる……！？

「危ないっ！！ 佐藤さん！！」

「えっ？」

このままじゃ佐藤さんの上に落ちちまう——ッ!!

「間に合え……っ!」

右足をバネに、前へ向かって大きく飛び上がる。佐藤さんの肩を掴むのと、僕の頭に鋭い痛みが走るのは、まったく同時のことであった。

『ドツシヤアアアアンツッ!!』

まるで世界を引っくり返したかのような音が、教室中に響き渡った。

「ま、松上くん!!」

「……………」

「松上くん! 大丈夫!? 松上くん!!」

……………っ。

「いてて」

「松上くん!」

背中の上に乗っている物が、すごい勢いでどかされていく。おそらく佐藤さんがやってくれているのだろう。

「あ、ありがとう」

「ありがとっはこっちの台詞だよ!! 大丈夫? 動ける!？」

今、僕はうつぶせに倒れている状態となり、周りには物が散乱し、

僕の前方には佐藤さんが上半身だけ起こしてこちらの様子を伺っている。

「だ、大丈夫、大丈夫。ちょっと物が当たっただけだからさ。それより佐藤さん、さっき突き飛ばしちゃったけど何ともない……？」
「うん、私は大丈夫だから！ 松上くんは？ 痛いところとかない？」

「ん、平気だよ」

そう言つて僕は床に両手をつき、体を起き上がらせる。さすがに背中やら頭やらが少し痛んだが、血も出ていないし、特に問題はないみたいだ。明日痣が出来ているくらいだろう。

僕が顔を前に向けると、佐藤さんの不安そうな表情がはつきりと見えた。

こんな表情でも佐藤さんは可愛い……と思ったのも束の間、彼女は突如正座をし、頭を下げてくる。

「本当にごめんなさいっ！！」

「え？ あ、いや」

「仕事手伝わせちゃった上に、私の不注意でこんな大変な目にまであつて……何て言つていいか……本当にごめんなさい！」

「そんな、謝らないでよ」

僕は立ち上がり、俯く佐藤さんに手を差し伸べる。

「それにどうせ言ってもらえるなら、お礼の方が僕は嬉しいよ」
「ま、松上くん……」

顔を上げた彼女は手を握り、僕が軽く引いて立ち上がる。

「……助けてくれてありがとう、松上くん」
「どういたしまして」

決まったこれ完全に決まっただろこれ。助けるっていうよりかは勝手に体が動いただけなんだけれどこれはヤバイ完全に漫画とかにある展開だつて。今考えるとすぐえクサイ台詞言っただけどオールオーケー、問題なし。完璧のタイミングだったぞ、これは間違いなく高評価のはず、やべえ超嬉しい自分がまるでイケメン主人公みたいな行動をとれたことにノーベル賞を捧げたいレベル。ほら佐藤さんもめっちゃ感動しているだろこれやばいだろこれ。どう考えても一般生徒からの格が上がったとは思えないでしょ、てかまじやべえ。気持ち悪いぐらいに心臓高鳴ってるし、めっちゃ佐藤さんと接近しちゃった、そーいや倒れる時に佐藤さんのパンツが見えたような、つてああやめろ、僕。こんな格好いいシーンでいかがわしいことを考えるんじゃない。にしてもマジで今のはやばかったわー。

「——とにかく佐藤さんが無事でよかったよ」

「え、ああうん。今十秒くらい間があいた気がしたけど……」

「それじゃ散らばったものとか片して、帰ろうか」

落ちてきたものを手分けして空き箱に積み、今度は安全な位置に置く。やっている最中に佐藤さんは、これは大掃除が必要だなあ、とかボヤいていたけど、そう思うのも仕方ないくらい物の多い場所だった。

そうしてなんとか片付き、僕たちは鍵を閉め、図書室を後にする。

「松上くん、本当に大丈夫？ やっぱり病院に行った方がいいんじゃないかな？ お金は私が出すから……」

「大丈夫だつて。危ないって思ったらちゃんと自分から行くよ。だから佐藤さんは心配しないで」

「でも……」

まあ、彼女の場合はするなって方が難しいか。
廊下を抜け、下駄箱につく。靴を履き替えて、僕はつい、ため息を漏らしてしまった。

「やっぱりまだ雨降ってるなあ……」

ザアザアと音を立て、大粒の雨が地面に落ちては跳ね、落ちては跳ねを繰り返していた。

「松上くん、傘持ってるの？」

「あーうん、まさか降るとは思わなくてさ」

「天気予報はちゃんとチェックした方がいいよ。それじゃ、行こ」

「ああうん、それじゃ」

その後にすべき任務も忘れ、思わず手を振りそうになってしまった僕を、佐藤さんは首を傾げて見つめ直す。

「何してるの。私の傘に入ってる」

「え!?!」

そ、そんな……! こ、これは都市伝説と囁かれていた……あ、あいあいあいあいあいあいあいあいあいあいがいさつ!?!? まさか自分が、それも佐藤さんと経験できるなんて……。

「い、いいの?」

「もちろん。こんなことでさっきのお返しが出来るとは思わないけど……」

「ううん、十分だよ! ありがとう!」

そうして僕たちは、二人で昇降口を出た。まさに、夢心地だ。もうここで死んでもいい。僕は今日何度死ぬ宣言をしただろうか。パシャパシャと音を鳴らしながら歩く中、先に口を開いたのは佐藤さんだった。

「松上くんから貰った手紙、面白かったよ」

「え？ ああー」

僕のギャグセンス満載のアレか。お気に召したようでよかった。

「でも、もうちょっと真面目な文章の方がいいかもよー？ あれじやイタズラだって勘違いしちゃう人もいるだろうし」

「ま、まじっすか、気をつけます……」

……………。

……………そうだ。夢のような感じで忘れていたけど。

「告白しなきゃいけないんだった……」

「え？ 何か言った？ 松上くん」

「あ、いや何も！」

まずい、思わず声に出してしまうとは……完全に焦っているな、僕。でも、どのタイミングだ？ やっぱり別れ際がいいよな？

「さ、佐藤さんの家ってどこだったけ？」

「線路渡った向こうだけど、今日は気にしないで。松上くんの家まで送っていくから」

「え？ そんな悪いよ」

「じゃあ、送らせてくださいお願いします」

「あ、ええと……お願いします」

むむ、となると僕の家の前で告白……か。やばい緊張するな。緑川は無理だって言っていたけど、本当にそうだろうか。今日ならいけるんじゃないか？ 今なら……。

上の空状態で世間話を続けていると、あっという間に僕の家へとたどり着いた。

「ここが松上くんの家かぁ。良いところだね」
「そんなことないさ、普通だよ」

ああ、やばい。

「それじゃ、今日は本当にごめん。それにありがとう」
やばいやばいやばい。

「き、気をつけて帰ってね」

い、言わなきゃ。言わなきゃ……！

「うん、それじゃあね」

言わなきゃ……ッ！

「や……」

既に数メートル離れてしまっている彼女の後姿に向かって、僕は叫ぶ。

「佐藤さんっ!!」

せつかく濡れないようにと家まで届けてくれた佐藤さんの気持ちも忘れて、僕は雨が降り続く道路へ足を踏み出した。視線の先にあるのは、驚いた表情でこちらを振り返る女の子の姿。

「佐藤さんに、伝えたいことがあるんだ!」

考えてみれば、告白なんて初めてのことだった。

何て言えばいいのかわからない。何を言葉にすればいいのかわからない。

けど、きっと今なら、彼女は受け止めてくれるはず。
今なら……!

『松上くん! 大丈夫!?』

今ならきつと。

『大丈夫? 動ける!?』

彼女は、佐藤さんは。

『本当にごめんなさい!』

僕からの告白を――

『松上くん、本当に大丈夫？』

――断ることが、できないはずだから。

雨は僕を痛めつけるかのように、激しく降り続いていた。

「……………くそお」

呟いて、僕は目を開く。

カーテンの隙間から見える景色は僕の心を映し出したかのようにどんよりとした曇り空で、起き上がるのも億劫だった。

思わず、ため息をつく。

……………ちくしょう。

「佐藤さんに、会いたくない……………」

ベッドの下には、それが元々何だったのか分からないくらいのガラクタが転がっていた。

一時間目には出席しなかった。別にサボったわけじゃあない。

朝、ベッドから降りると同時に足首に激痛が走り、思わず前のめりに倒れてしまった。僕の部屋は二階にあるのだが、その倒れた音を聞いて母親が僕のところまで訪れ、その場は転んだだけだとか適当に取り繕えたのだけれど、結局その後の右足を庇う不自然な動作によってばれて、病院へと強制連行されてしまった。

捻挫、だそうだ。

一週間も経てば痛みは引き、二週間もすれば完治。そんな安っぽい怪我なのに包帯まで巻かれ、何だか恥ずかしい気分になったのは言うまでもないだろう。

最初の激痛だって、最初だからこそ驚いて変に痛みを感じてしまっ

だが、慣れてしまえばそれほど苦しいものではなかった。

「でもまさか、足にきてるとはな……」

図書室の出来事。細かく言うならその奥の教室で起こった出来事だが、おそらく僕があの時、変な体制で無理やりジャンプをしたから、このような結果になったのだろう。

もし佐藤さんがこの怪我を見たら、何と言っただろうか。

「……………クソッ」

考えたくもない。学校で何故遅刻したのか聞かれたら、寝坊と答えようと心に誓った。まったくもって、馬鹿な誓いである。そんなことをしても、昨日のことは何も変わらないのに。

しかしいくら遅刻と言えど、丁度良い時間帯に偶然教室に入れる機会は少ない。そういう時は大抵次の休憩時間までどこかで時間を潰してから向かうのだが、今日はそういう気分にもなれなかった。

二時間目の途中、シーンとなっている室内を無視して、僕は教室の扉を開けた。スーッと開けばいいのに、何故学校の扉はこう音が立つんだろう。

「お、ああ松上か。なんだ、寝坊か？」

教卓に立つ教師が、一応と言った感じで僕に尋ねてくる。その問いに僕は小さくはい、と答えた後、自分の席に座った。

僕にあいさつをしてくる人はいない。やっぱり僕は、佐藤さんとは違うらしい。

緑川も僕のいつもとは違う雰囲気を感じ取っているのか、視線こそちらちらと向けるものの、声をかけてこようとはしなかった。

僕はノートも教科書も出さずに、肘をついて窓の方を見る。

僅かに反射するガラスの窓は、いつも通りに勉強をする佐藤さんの後姿を映し出していた。

「なあ松上、どうしたんだよ」

と、緑川が肩を叩いてきたのは、二時間目が終わってすぐのことだった。

「別に……ああ、フラれたよ」

「んなこたあ言われずとも分かるわ。そうじゃなくて、他にも何かあったんだろ？　ただフラれただけじゃ、こんな負のオーラまで持ち出してこねえよ」

相変わらず失礼な野郎め。心配してくれるのはありがたいが、ちつとは励ませつての。

「まあ、なんつーか……緑川、悔いのないようにつて言っただろ？　悪い。あれ、達成できなかった」

そう言つと、緑川は悩んだように右手で後頭部をかきながら、返事をしてくる。

「いや、別に謝られても困るが……まあいいや。お前が話したくなる時まで待つてやるよ。それと、もう一つ」

「なんだ」

「お前が教室に入ってきた時の佐藤の表情、普通じゃなかったぞ」

不安つーか、泣きそうつーか、よく分かんねえ表情をしてた、と続ける緑川。

……そうか、見ていなかったから気づかなかったな。

「それと、最後に一つ」

「一つだけじゃないのかよ」

「まあこれは、大して重要なことではない気もするが……」

彼が言い悩んでる間に、ピンポンパンポン、と教室の放送器具が鳴り出す。何か全校生徒に連絡でもあるのだろうか。

『えー、屋上の鍵を持っている生徒は、今すぐ職員室にまで返しにきなさい。繰り返します……』

「……………鍵、返した方がいいぞ」

僕はポケットに手をつ込み、金属の感触を指で確かめながら言った。

「わ、忘れてたああー!!」

否、叫んだ。

「はあ、ついてないな……」

昼休み。僕は自動販売機の前で本日二度目のため息をついていた。あの放送の後、鍵をさり気なく元の位置まで返そうとしたのだが、結局見つかってしまい、お説教をくらうはめになった。使っていたのならまだしも、まったく使用していないわけだから、本当に怒られ損だ。

「……おまけに放課後は掃除まで任されちまった……」

まったくもって憂鬱だ。僕は何となく目のいったミルクティーを買いおうと思い、小銭を数枚自動販売機の中に入れる。

「……嘘だろ」

ガコン、と音を立てて出てきたのは、どこからどう見てもミルクティーではなかった。オレンジ色の缶にオレンジの絵柄が書いてあるそれをオレンジジュースと呼ぶしないで、他に何と呼ぶのだろうか。試しにふたを開けて口に流し込んでみるが、どんなに脳を柔らかくしようと、ミルクティーとは似ても似つかない味だった。

「ついてねえ」

改めて買い直す気にもならず、わざわざ文句を言いに行くほどの体力もないため、僕はその缶を持って、一人、人のいないベンチに座り込む。

そしてつい、昨日のことを思い出してしまった。

雨が降り続く中、道路へ飛び出した僕。驚いた表情でこちらを見る佐藤さん。

『僕ずっと、佐藤さんのことが——』

二時間目の終わりに緑川に言われた通り、ただフラれただけじゃここまで落ち込むことはなかっただろう。

ここまで、自己嫌悪に落ちることはなかっただろう。

……いや、正確に言えばフラれてはいない。僕の告白を聞いた佐藤さんは、少し俯いて、下唇をかみ締めた後、何も言わずに後ろを向いた。そして、雨のたまる地面を音を立てて走っていった。

堅く口を閉ざしたまま、ただ僕から逃げるかのように。

「……………くそっ」

肘を腿につけ、両手で頭を掻き毟る。記憶にある彼女の手は、震えていた。

佐藤さんは優しい。僕はその優しさに惚れながら、その優しさを利用したのだ。怪我をさせてしまったという責任感を、僕は利用したのだ。

つり橋効果を知っているだろうか。橋から落ちそうという恐怖感を勘違いさせ、別の感情にすりかえること。そこで告白をされたら、恐怖心と恋愛の心を勘違いしてしまい、ついオーケーしてしまうというあれだ。

それも卑怯と言えば卑怯だが、僕に比べたらまだ良い方だ。それは相手側に自覚がなく起こるもの。対して僕は相手がはっきりと理解しているのに、無理やり行おうとした。

「なにが主人公だ。こんな最低な主人公いてたまるかよ……」

眩き、空を見上げる。朝と同様、僕の心を映し出したかのようなどんよりとした曇り空だった。

僕は魂が抜けたように残りの時間を過ごした後、帰りのホームルームを終え、クラスから人がいなくなるのを待った。掃除というのは主に自分のクラスの教室を一人でやるらしい。今日が掃除当番だったものは、ラッキー、と言いながら去っていった。

「……さて、始めるか……」

机を移動したり、ゴミを掃いたりしなきゃいけないから、一人では結構大変そうだ。まあ家に帰ったところでまた昨日のことを思い出してしまうだろうから、いい時間潰しといえばそうなのだが。

端から机を持ち、後ろに下げていく。やっている途中で、僕が机を下げる音の他にもう一つ、同じような音がしているのに気がついた。反射的に、その方向を振り向く。そして、僕と同じように机を運んでいる人物に向かって言った。

「何やってんの、佐藤さん……」

口に出された本人は、表情をまるで変えず、それどころか机を動かす動作さえ止めずに言葉を返す。

「私、掃除当番だから」

「今日の掃除は僕だけって、担任が言ってただろ……？」

「そっなの？ 聞いてなかった」

そんなわけがない。佐藤さんが教師の話を聞き漏らすなんてこと、今まで一度もなかった。

手を止め続ける僕に対し、佐藤さんはでも、と続ける。

「二人でやった方が早く終わるし、いいじゃない」

その言葉に対して思わず、自らの拳を握り締めた。

「何のつもりだよ。佐藤さんはやる必要なんてないじゃないか」

「……昨日の松上くんだって、私の仕事を手伝う必要はなかった」

「いいやあつたよ！」

体が熱い、頭が混乱しているのが分かる。それでも、勝手に動き続ける口を止めることはできなかった。

「僕は佐藤さんに告白をしたかった！ そのためにも佐藤さんに好かれなければいけなかった！」

「……………」

「それに比べて佐藤さんはどうなんだよ！ 僕に構う必要なんてないじゃないか！ 一緒に帰る友達だったくさんいるんだろ！？」

その人たちを無視してまで僕に付き合う必要なんてない！！」

「……足」

いきり立つ僕とは対称的に、佐藤さんは動かしていた手を休め、落ち着いた瞳で僕を見る。同時に彼女が指差すのは、僕の右足だ。

「今日一日、右足を庇うような動作が多かった。一時間目に遅れたのも寝坊なんかじゃなくて、病院に行っていたんでしょ？」

「……佐藤さんには関係ない」

「関係ないわけ、ないじゃない」

「じゃあなんだよ、罪悪感で僕を手伝ってるのか？ 罪滅ぼしでこんなことしているのか！？」

ふざけんな、余計なお世話なんだよ。昨日僕がしたことを見たらどう？ 僕は最低な人間なんだよ。なんでそんなやつに話しかけるんだよ。いつそのこと嫌いになって、口もきかないでいてくれよ！

「僕は佐藤さんみたいに、出来た人間じゃないッ！！」

明かりのついていない、薄暗い教室で、僕は今まで彼女に見せたことのない顔をする。

怒鳴るつもりなんてなかった。せつかくあちから歩み寄ってきてくれたのに、それをわざわざ突き放すつもりなんてなかった。けれど、言葉は止むことを知らない。

「止めてくれよ、迷惑なんだ！ 佐藤さんはそれで満足するかもしれないけど、僕は苦しいだけなんだよ！ 惨めなだけなんだよ！！！」

机の上を硬く握った拳でドン、と叩きつける。まだまだ口に出そうとしていたことはたくさんあったけど、感情が押し寄せたせいで、それらは声に出せずに終わった。その代わりとばかりに目から涙が溢れ出てくる。

「……………松上くん」

「帰ってくれ」

「……………」

「お願いだから、僕をこれ以上惨めにさせないでくれ」

涙声で懇願する僕を見て、佐藤さんは運ぶ途中だった机から身を離れた。教室の脇に置いてあったのであろう鞆を持ち、出口へと向か

う。

僕はそれを見た後、せめてこれ以上こんな顔を見せないように、佐藤さんがいる方とは逆の方向に体を向けた。

「……………松上くん、これだけは言わせて」

「……………」

「私は、罪滅ぼしなんかであなたを手伝ったつもりはない」

教室から離れていく足音を聞きながら、僕は一人声を押し殺して泣いた。悔し涙は、しょっぱくなんてなかった。

翌日の朝は、昨日にも増して嫌な目覚めだった。

ベッドから起き上がり、自分の体を見る。着ているのはいつもの寝巻きではなく、学生服だった。

「ってことは、昨日のはやっぱり夢じゃないんだな……」

僅かでもそんな可能性を期待していた自分に腹が立った。時間を巻き戻すことができないように、現実でも夢オチで済まされることはないのだ。

できることならこのまま二度寝をしてしまいたい気分だったが、それはいけないことだろう。学生として、ではなく、自分として。

シャワーを浴びて、朝食を食べて、家を出て。学校に着いたとたん声をかけてきたのは、いつものことながら緑川であった。

「おい松上！ 聞いて驚け！」

「わーびっくりー」

「まだ何も言ってねえだろうが！」

できれば早く席に座って、朝に取れなかった睡眠をしたいんだがな、と思っただけで、あまりにも緑川が必死なのでその場で話を聞いてやることにした。

「ふっ、松上。失恋した時はどうすればいいと思う？」

「前置きはいいいよ」

「ノリ悪いな！ ちゃんと答えろよ！」

「はいはい……ふて寝、とか？」

「まあお前の場合はそうかもしれないが……正しくはこうだ、松上」

右手で俺の肩を掴み、左手でガッツポーズを見せる緑川。続けて彼は口を開く。

「新しい恋に生きるっ!!」

「はあ……」

まあ分からんでもないが……まだ二日目だから傷は深いぞ。それに。

「新しく好きな人ができたわけでもないし……」

「だからこそだよ! 松上!」

「はあ?」

「いいか、よく聞け! そして俺の言葉に歓喜しろ!」

いろいろと前置きの多い野郎だ。肩から手を離し、そのまま僕の顔へ向けビシッと指を差す。

「合コンを開くぞ!! 松上!」

「合……コン……?」

活字で表すと合唱コンクールの略称にも見えなくはないが、さすがにそれはないだろう。でももし僕がこんなありきたりなボケをしたら、緑川は何てつつこんでくれるだろうか。そこには少し興味がある。

「それってもしかして……合唱コンクールの略!?」

「あほっ! 合同コンパの略だよ!」

はあ。がっかりだよ、お前には。

「おい松上、何故人をそんな蔑んだ目で見つめる」

「残念ながらお前にツツコミの才能はないらしいな……」

「何の話だよ！」

それに正しくは、合同コンパニオンの略だろうしな……………むっ！？

「み、緑川……お前、まさか！」

「はっ、やっと気づいたか松上。俺はお前がそんな安っぽいボケをしてくるのは分かっていた。だからあえて単純なツツコミをせず、ツツコミに見せたボケを繰り出したんだよ！！」

や、やられた……！ 今のはつまり、

合唱コンクール？ ↓ 合同コンパ！ ↓ 合同コンパニオンだろ！

の流れだったんだ！ くそ、ぬかった！ 真にツツコミの才能がないのは、僕だったってわけか……！！

「ちくしょう……完敗だよ、緑川」

「へっ、気にすんな。才能なんて、努力でいくらでも取り返せる」
「ああ、そうだな」

それじゃ、僕は行くよ、と告げて、自分の席に赴く僕。

「ってちよつと待てええええいつ！」

そんな僕をオーバーアクションでつつこんだのは、今さっき別れたばかりの緑川だった。

「なんだよ。僕の負けでいいから行かせてくれよ」

「そんな話はどうでもいいんだよ！　つかお前ボケどうこうじゃない、話題を掴みやがれ！　合コンだよ合コン！　俺たちは合コンをするの！！」

ええ、めんどくさ……。

「あつ、お前今めんどくさつ、て思っただろ！」

「思ってないよ。正しくはめんどくさ、だ」

「変わんねえだろ！」

「ちっちゃい『つ』がないだろうが！」

「世界一どうでもいいわあ！！」

はあ、はあ、と、ヒートアップしすぎたせいでお互い肩を上下に揺らす。鞆すら机に置いてないのに、僕は何をやっているんだろう……。

「と、とにかく……お前も参加だからな、合コン」

「はあ？　ざけんな……殺すぞ」

「どれだけキレてんだよお前……」

あ、でもこいつ、もしかして……。

「僕を元気づけるために、こんなこと……」

「へっ、いつまでも暗いやつがいたら、こっちまで気が滅入るんだよ」

「うわ、こいつ超めんどくせえ」

「せっかく格好良く言ったのに台無しだな！」

まあ本当は昨日の今日でテンションなんて上がらないし、暗い気持

ちを払拭させることなんてできないけれど……。

「ま、さっそくの誘いだ。参加させてもらっよ」

「はっ、そうこなくっちゃな」

こいつさつきから『へっ』とか『はっ』とかうるせえな。

「でも高校生の分際で合コンとはな……」

「気にすんなよ。それよりも問題があるんだ」

なんだ、と僕が問うと、緑川は周りを見回しながら言う。

「いや、相手側が三人でな……俺たちが二人だけってわけにはいかないから、あと一人誰かを誘わなきゃならないんだが……」

「なんだ、誘う奴がいらないのか。友達少ないもんなお前」

「ちげえよ！ てかお前よりは少なくねえよ！」

そうじゃなくて、と続ける緑川。

「ほら、せっかくの合コンだったのに、俺たちより目立つ奴が来ちゃ、そいつに全部持ってかれちまうだろ？」

「む、確かに……」

「だから人選に悩んでるんだ。松上、誰か良さそうなやつはいるか？」

うーん……難しいな……。

教室中を見回すが、僕より目立つ奴らばっかなので、一向に目星がつかない。くそ、誰か……誰か……あつ。

「あの子なんかどう？」

僕の席が一番後ろの窓際なのに対し、その反対。一番後ろの廊下側に位置する席を指差し、僕は緑川に尋ねる。

「あいつは……東、か」

パツと名前が思い出されないほどに目だたなく、眼鏡をかけ、いつも読書に耽っている。前髪の長さも相まって、暗いイメージが固定された少年……それが東だった。

「まあ俺たちよりは目立たないだろうが……果たして女子受けはいもんなのか……？」

「大丈夫、大丈夫。いざとなったら二人で女子の対応をすればいいんだし」

あ、でもよく考えたら僕も女子の対応の仕方分かんないや……まあいつか。なんとかなるでしょう。

「んじゃ、もうチャイム鳴りそうだから、昼休みくらいにでも声かけてみつか」

「そうだね、それじゃ」

やっと席に着ける。そう思いながら僕は足を進めた。

そうしてあつという間に昼休み。僕と緑川は素早く昼食をすまし、サンドイッチを食べながら読書に耽る東くんの下に急いだ。緑川が彼の机に手をつき、出来る限りの笑顔で呼びかける。

「なあ東！」

「……………はい？」

本を置き、こちらに顔を向ける東くん。普段話しかけられない二人から歩み寄られ、動揺しているようにも見えた。よし、いきなり誘うのもアレだし、まずは僕から日常会話を投げかけてみよう。

「最近どう？ 東くん」

「はあ……別に普通ですが」

「東くんよく本を読んでるよね！ オススメとかない？」

「言っても分からないと思いますよ」

「じゃあ好きなジャンルとかは？」

「うーん、いろいろ読むので、特に好きとかは……………」

「どう？ 学校楽しい？」

「学校はそもそも勉強する場なので、その質問には答えかねます」

「麺類だったらラーメン派？ そば派？」

「どちらも好きじゃありません」

「やっぱ目玉焼きには醤油だよねー！」

「それは同意を求めているんですか？」

……………。
うわ、こいつ、超めんどくせえ……………。

「あの、それよりも松上くんたちは何をしにきたんですか？ 普段僕になんか話しかけないのに」

「あ、ええと……それはね」

そこまで言いかけたところで、緑川が俺に任せろと言わんばかりに口を出してくる。

「いいか東！ 人間は大きく分けて二種類ある。それは男と女だ！」
そこから持っていくのか……？

「何故区別されているのか分かるか？ 東。それはな、お互いが惹かれあい、結びつくために——」

「はあ……」

「ってオイ、読書に戻るな。あーもう分かった。端的に言おう」

両手を机につき、顔を近づかせながら息を吸う緑川。画だけを見る
となんだか気持ち悪かった。

「東！ 俺たちと合コンに行こう！」

「……………」

その誘いに対し、東くんは本の方に向けていた顔をゆっくりとこちらに向けて、

「嫌です」

小さく言い放った。

「な、何でだ東！　こんなチャンスめったにないぞ！」

「嫌です」

「そつだよ東くん！　たださえモテる雰囲気ゼロなんだから、こういうチャンスを生かさない！」

「……嫌です」

「くそつ東！　お前このまま一生独りで生きていくつもりかよ！

明らかにお前モテねえだろコラ！」

「……嫌」

「モテないのにやせ我慢する童貞東くん！　東童貞とどっちがいい！？」

「……………」

「それとも真ん中に入れて童貞貞がいいか！？　何人だオメエー！」
「……………」

そこまで言つて、ガタンと音がする。見ると、東くんは手に持っていた本を床に落とし、それと同時にイスから立ち上がっていた。前髪のせいでよく見えない瞳をこちらに向けながら、彼は大きく息を吸う。

そして、言つた。

「なんなんだよお前らいきなり出てきて無理な誘いをしてきた上にこつちを罵倒か？　調子のんなこら、頭蓋骨にひびいてほしいのか、ああ？　第一、何でお前らが俺を誘うんだよ。理由として考えられるのは三つ。一つは自分たちより目立たないから。二つ目は俺なら断られなそうだから。三つ目は自分立ちを引き立たせたいからどうだ間違っているか？　言ってみろボケ。大体利用されんのが目に見えてて行くわけねえだろアホ、お前らみたいなアホじゃなきゃそんな誘い受けねえよ。どうせお前らはエッチとかセックスとかがしたいだけだろ？　この猿が。動物園の檻の中にでも閉じこもって

一生オナツてるカス。このゴミ以下のクズ共が」

.....。

「え、ええと.....」

落ち着け、落ち着け。まずは深呼吸。そして確認。

「東くん、だよね.....？」

そこにきて、問いをぶつけられた本人はしまった、とでも言いた気な表情を見せる。

「あの、その.....」

「.....」

「えっとお.....」

「.....」

「ぼ、僕は何も言っていない僕は何も言っていない.....」

「「うそつけえーッ！！」」

こつちが言葉を失くすほど話していたよ！ 怖いくらいにね！
それを聞いて東くんは先ほどまでの態度とは一変、両手を合わせ、
僕たちに懇願するように頭を下げてきた。

「ごめんなさいっ！ 僕、キレると周りが見えなくなるタイプなんです！」

「いや、人格が変わるタイプだよ」

「おまけについ我慢しきれず、キレやすいせいで.....」

「よく今までバレなかったね」

「お願いします、このことはどうか他の人にばらさないで……」

僕がいいよ、と言おうとした瞬間、今まで黙っていた緑川の手が伸び、僕の口を塞ぐ。思わず彼を見ると、まるで漫画の悪役に出てきそうな、あくどい笑みを浮かべていた。

「ふうん、そうかそうか。東はキレイやすい性格なんだなあ」

「は、はい……」

「いやー、驚いた驚いた。まさかあのおとなしい東が……で、要求はなんだっけ？」

「あ、あのだろうかこのことは内密に……」

「違う違う。お前のじゃなくて、俺たちの、だよ」

「はあ……合コンに同行してくれ、ですか……？」

「そうそう、それぞれ。んで……どうするんだ？ 東。断るのか？」

こ、この男……さっきの出来事を利用して、東くんを丸め込もうとしてやがる……！ しかも自分から要求は言わず、言葉にして脅すこともせずに……自らの手は汚さないって言うのか……！

「え、ええー……」

「いや、別に無理しなくていいんだぞ東。断りたいときは断れば良い。」断りたい”時はな”

「あ、うう……」

「さあ、どうなんだ東。答えてもらおうか？」

「……………わ、分かりました。行きます、行かせていただきます……………」

緑川はやはり、恐ろしい人物なのかもしれない……。まあ何はともあれ、これで人数は揃ったというわけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845x/>

誰にも優しい佐藤さん

2011年10月31日11時24分発行